「日本人の自信の回復と伝道」

西九州伝道所　佐々木正
明

ここ 30 年近く、日本は経済的にかなり苦戦しています。1970 年代から 1990 年代の始めまで持っていた自信を、日本人は失いかけています。ところが日本人は、別の意味で自信を取り戻しつつあります。それは道徳的なあるいは倫理的な自信です。自分の国の文化に対する自信とも言えそうです。

倫理的観点から見て、あるいは文化という側面から計って、日本は世界の国々より劣ってはいなかったし、いまも劣っていない。キリスト教国と言われる諸国の歴史と現代の実情に照らし合わせても、日本は決して劣っていないばかりか、むしろ勝れているということに、多くの日本人が気付き始めています。

キリスト教を信奉していた西欧の白人諸国が、大航海時代、植民地主義時代、帝国主義時代にわたって戦争に明け暮れ、侵略と搾取と抑圧と殺戮に血眼になっていたとき、日本は徳川幕府によって戦

争のない 250 年間を過ごしていました。そのために日本は、戦争に必要な大きな技術や工業には後れを取りましたが、人を思いやる平和な営みとそのための学問、文学、技能、美術、演劇などの分野では、他に類を見ない発展を遂げました。これがどんなに「すごいこと」であったかというようなことにも、平均的な日本人が気づき始め、自分たちの国を改めて評価しているのです。これまでのように、鎖国のために欧米に後れを取った愚かな日本というような、一辺倒な見方ではなくなってきたのです。

　確かに日本は、植民地主義の西欧諸国によって開国を迫られ、その力に屈したかのように見えました。しかし、何とか植民地になる憂き目からは逃れて独立国家となり、西欧諸国に追いつき追い越すために富国強兵を旗印にして邁進しました。現代の民主主義的感覚や人権を重んじる倫理からすると、様々な不足があったことは事実ですが、当時の国際感覚を勘定に入れても、このときの日本の選択は、まさに見事というほかはありません。偶然も重なったとはいえ、日本人の精神性の高さが根底にあります。

いま私たちは、情報システムと交通の発展に助けられて、まさに国際的感覚をもって、より客観的に自分たちを見ることができるようになっています。秘密にされ、また誤解されていた歴史的な国際問題も、主に、アメリカ政府の情報開示、特に「ウルトラ・トップ・シークレット」と分類されていた情報の開示などに助けられて、かなり明らかになってきています。戦後ずっと担い続けてきた「戦争犯罪国家日本」という精神的負い目が、実は大部分、戦勝国アメリカによって故意にねじ曲げられた、歴史教育の洗脳によるものだということが、このところずいぶん明らかになってきています。

現在でも、戦勝国であり戦後の実質的な日本の統治国であったアメリカの、日本を戦争犯罪者国家にでっちあげる歴史洗脳教育を信じている人が、多数派を占めているかもしれません。しかし、いわゆる「War Guilt Information Program」と言うアメリカ政府の中枢で作られ、マッカーサーによって日本で実施された洗脳教育のことを知り、自分多たちが騙されて来たことを知る人が増えてきているのも事実です。そのようなことを知らなくても、多くん日本人はベトナム戦争を境として、アメリカを始めとする西欧白人諸国の偽善と

欺瞞に満ちた戦争犯罪を、数多く知るようになったのです。今世紀に入ってからはその傾向がますます強くなっています。つい最近は、長い間左翼系の主要メディアとして、ねつ造された日本軍の戦争犯罪をいくつも報じ続けてきた朝日新聞が、とうとう慰安婦問題で詫びを入れたことは良く知られています。(詫びを入れたのは日本語でだけで、英語ではやっていません。つまり日本人に対してだけであり、世界の人々をだまし続けたことに詫びを入れていません）これらを

もって、日本国民が右翼に傾き始めたと論じる向きもありますが、むしろ、自分たちの倫理的高さを再認識していると言ったほうが良いように思います。

戦後しばらく日本人が持ち続けた、アメリカの民主主義、平等、人権などへの憧憬が、ベトナム戦争とそれに続多くの紛争で、アメリカの本当の態度を知ることによって、消滅してしまったのです。アメリカが敗戦国日本に対して行ってくれた、多くの人道主義的な善行を高く評価したとしても、アメリカもほかの国々と同じように利己主義で偽善的だということが、白日の下に晒されるようになって

きたのです。戦後のアメリカが日本に行った人道主義的行いの数々は、確かに民主主義に支えられた、アメリカ人の良心の現れでもあったのですが、アメリカ政府の本心は、第一に、自らが行った戦争犯罪を自国民の目から隠し通すためであり、第二に、日本を犯罪国家に貶（おとし）めるためでした。日本人がいつまでも戦争を始めた罪悪感と、戦争に敗れた羞恥心を抱き続けて、二度と再び、アメリカをはじめとする白人国際社会の優位性に武力をもって、挑まなくするためだったのです。

簡単に言えば、白人社会では有色人種の日本人が、白人と同じ能力を発揮し力を持ち、自分たちと肩を並べることが許せなかったのです。そういう意味では、イタリヤもドイツも連合軍の敵国であり、日本との同盟国でしたが、彼らは白人であったという点で、異なった感覚で取り扱われたのです。例えば、東京裁判で唯一の有色人種裁判官であったインドのパール判事は、この裁判自体が茶番劇であり、法律を無視して日本を判事国家に仕上げるためのものであることを見破り、判事を止めています。白人キリスト教国イギリスの植民地国であったインドは、イギリスの犯罪を見続けてきたために、

このような形で日本を裁くことに、彼の正義感が赦さなかったのです。

ところが肝心の日本では、いまだに国民の多くが東京裁判は正当であったと、思い込んでいます。アメリカでは、裁判に関わった多くの判事や弁護士たちがその不当性を明らかにしています。そのような戦勝国による裁判を行うこと自体が、犯罪であったと断言する歴史家も少なくないのです。日本は律儀にも戦後 70 年間、戦争犯罪国家の烙印を負い続けてきました。これからも、日本人の多くがそうすることに賛成し続けることでしょう。戦争犯罪国家であったという作り話を、事実と認めてしまっているのです。

憲法第９条をナイーブに持ち続ける日本人は、他の多くの国の人々とは異なって、戦争そのものを犯罪と理解し、何はともあれ、日本は戦争をしたのであるから戦争犯罪国家なのだと感じ、（国際法では戦争が犯罪であるとはされていません）その汚名を濯ごうなどとはしないのです。戦争を犯罪と認め、自分たちがそれを犯したと認めることは、すばらしいことです。各地で行われた日本軍の犯罪が、

存在しなかったと言うつもりもありません。しかし同時に、敗戦国日本を裁き、戦争犯罪国家と烙印を押した国々が、日本よりもずっと大きな戦争犯罪を重ねていた、しかも数百年にわたって継続していたという、事実も知るようになったのです。

明治以降の日本の歴史にはたくさんの観方があって、統一見解と言うものを得るのは不可能です。ただ最近は多くの日本人が、日本人であることに誇りを持ち始めていることは、確かです。いくつかの調査によると、もう一度生まれ変わることができるなら、自分の国に生まれてきたいと答えた日本人は 90 パーセントを超え、世界で最も高率だったということです。自分の国に満足しているかということでは、日本人はまだ満足してはおりません。また、外国人による日本の評価もまだまだ低いのは事実です。一度造り上げられた「戦争犯罪国家日本」のイメージは、簡単には消え去らないのです。烙印は消えないのです。しかし、日本人は自分の国を認め、日本人であることに誇りを持ち始めているのも、紛れもない事実です。聖書も持たない、キリスト教国でもない日本に、多くの日本人は納得し、日本人であることに誇りと自信を持ちつつあり、そのような日本を認め

始めている国々も多くなっているのです。

そのような今の日本人に、聖書の高潔さ、キリスト教の崇高さを説こうとしても無駄に終わることでしょう。キリスト教はそんなに立派ではないからです。そのため、聖書までも見下されているのです。しかし、日本人が昔から心の奥深くで感じてきた、日本人の宗教感覚や倫理性から説き進めるならば、関心をもって聞いてもらえることが多くなり、聖書が教えている天地の創造者を理解し、受け入れてくれる日本人も少なくないはずです。聖書が教える天地の創造者は、日本人の宗教観にとてもよく合うのです。

明治以降の日本は、残虐な西欧植民地主義諸国家が奉じていたキリスト教を受け入れずに、知識や技術のみを取り入れました。キリスト教の代わりに、日本は国家神道を精神的支柱として建て、天皇制を築いて和魂洋才のスローガンを打ち立てたのです。この国家の選択は、歴史的に見て非常に優れたものであった、少なくても倫理的に見て秀でたものであったと言えます。もしもこの時点で、キリスト教を精神的支柱として取り入れていたならば、その後、西欧諸

国の植民地主義に倣って台湾を取り、韓国を併合し、満州に進出し、中国と戦い、一時的とは言え太平洋の島国や東南アジアの国々を支配下に置いた日本は、西欧キリスト教諸国に倣って、残虐非道植民地政策をやっていた可能性が大きいからです。

ただし、このあたりの歴史的な認識、あるいは理解は、同じ日本人でも、立場によってずいぶん異なっています。アメリカをはじめとする連合国（現在の国連）が描き上げた、日本を戦争犯罪国家とするための歴史観を、いまだに信じている左寄りの人たちがいる一方、右翼やそれに近い人たちは、以前から日本の犯罪性を軽く見がちです。愛国主義的な感情が、排他主義となり、有色人別紙に繋がっているからです。

どちらの見方がより真実に近いか、議論が沸騰中であることを理解しながらも、いま日本人の中に見られる明白な傾向は、左寄りの人たちの激減です。その理由の最も大きなものの一つが、現在明らかになりつつあるアメリカや連合国、つまり、伝統的キリスト教国の白人たちの犯罪性です。今や、満州事変から太平洋戦争に至るま

での間の、アメリカをはじめとした西欧キリスト教諸国の、白人の犯罪性が暴露され続けているのです。日本を自虐史観に陥れた、朝日新聞などの左寄りメディアの偽善性が、白日に晒されているだけでなく、日米開戦や戦後の日本統治に関するアメリカ政府の機密文書が、戦後 70 年以上たった今はすでに開示され、少しずつ、より確実な学びができるようになっているからです。

　今、世界の歴史と自分たちの国日本が通って来た道を、より公平に振り返ることができるようになった日本人が、キリスト教にあこがれを持つことは少なくなりました。野蛮な植民地主義国家の宗教であったキリスト教は、もはや尊敬できる宗教ではないのです。キリスト教の神は、日本人にとって「受け入れるべきでも信じるべきでもない神」となっているのです。太平洋戦争の後数十年は民主主義の国、人権の国、平等の国、自由の国、キリスト教の国として、多くの日本人に尊敬されていたアメリカは、もはやその尊敬を失ってしまいました。特に昨年の大統領選挙の醜さと滑稽さは、（トランプとクリントン）尊敬の対象であったアメリカを嘲笑と揶揄と軽蔑の対象にしてしまったのです。それはそのまま、彼らが告白するキリ

スト教に対する、白けた感覚に結び付いてしまいます。

（太平洋戦争の経緯は、どうやら、戦後私たちが受け続けてきた歴史の学びとは、相当かけ離れたものだったようです。ドイツとイタリアを敵として苦戦していたヨーロッパの連合国から、戦線に加わってほしいと催促されていた、時のアメリカ大統領ルーズベルトは、どうしてもそれに応じることができませんでした。彼が大統選挙運動中に、ヨーロッパ戦線には加わらないと公約していたことと、当時のアメリカ国民の80パーセントが、ヨーロッパの戦争に巻き込まれることに反対していたからです。それでルーズベルトは、ドイツとイタリアと連盟を結んでいた日本と戦争を始めれば、しかも日本に、非常に卑怯だと思われる方法で戦争を始めさせることができれば、アメリカ国民の義憤を呼び起こし、日本とだけではなく、ヨーロッパの戦争にも加わることができると考えて、経済封鎖をはじめとしたあらゆる方法で日本を挑発し、アメリカを攻撃させようとしたのです。

日本軍の無線交信が傍聴され、暗号が解読されていることすら知

らなかった日本は、真珠湾の奇襲をもってアメリカとの戦争を始めました。ルーズベルトはほくそ笑んだことでしょう。真珠湾とその入り口に旧式の戦艦を集め、日本の奇襲が成功するように、わざわざお膳立てさえしています。日本からの宣戦布告が、奇襲前に彼に届いたかどうかという議論が、専門家と言われる人々の間ではよくされていますが、どちらにしてもルーズベルトは知った上で、待ち構えていたのです。このことはフィリピンに居たマッカーサーにも知らされていたのですが、当のハワイの司令官には知らされていませんでした。卑怯な黄色人種日本人に対するアメリカ国民の怒りをより大きくするため、自国の兵士たちの命を犠牲にしたのです。《筆者がこの話をはじめて聞いたのは 1974 年、フィリピンの神学校で学んでいたときでした。歴史を専攻していたアメリカ人宣教師が、「ここに日本人の学生がいるようだが・・・・。　・・・アメリカでもまだごくわずかの歴史家たちしか知らないこと・・・」と前置きして、わざわざ授業とは関わりのない話をしてくださったのです。朝日新聞の申し子みたいだった当時の筆者には、まさに信じられない驚くべき話でした。》

開戦当時のアメリカは、今よりもっともっと悪い人種差別の国でした。人権は白人に限って認められていたのです。ルーズベルト自身、非常に強い人種差別主義者でした。ピューリタンによって始められた国であるにも拘わらず、アメリカでは数百万人の先住民が騙され、土地を奪われ、殺されています。福沢諭吉に真似られた、ジェファーソン大統領の有名な人権宣言も、すべての人間の平等を謳ったものではなく、白人だけに限られた人権を認めるだけでした。数百万の黒人奴隷が牛馬のごとく働かせられ、一切の人権を認められず、痛められ虐げられ殺されて行きました。試しに、ネットで「Strange fruit」と検索してみてください。たったの一例ですが、いかに残酷なことが行われていたか、知ることができます。アメリカで黒人の人権が認められたのは 1966 年、それが執行されたのは 1969 年のことです。

言い方によれば、日本が戦ったロシアとの戦いも、清国との戦いも、大東亜戦争も、太平洋戦争も、白人支配に対する有色人種の戦いでもあったのです。日本は太平洋戦争では負けましたが、有色人種を白人支配から解放するという点ではかなり成功したのです。東南

アジア諸国は戦後すべて白人諸国から独立したからです。インドネシアやマレーシアなどは、残留日本兵が独立を支援してたたきました。この独立の機運アフリカなどの諸国に広がったのです。残念ながら、白人支配はまだまだ形を変えて続いていますが、植民地が解放されたのは事実です。

　ともあれルーズベルトの作戦は見事に成功しました。真珠湾奇襲を受けたアメリカ国民は、義憤を爆発させて日本との戦争を正当化し、ヨーロッパ戦線にも大義をもって加わることができたのです。ところがこれは、単にアメリカ人の義憤を呼び起し、ついには日本に勝利させただけではすみませんでした。アメリカは、ルーズベルトの後を継いだ大統領も、もちろん、アメリカの大義を引き継がなければなりませんでした。アメリカ国民を欺き続けるには、日本を戦争犯罪国家に仕立てなければならなかったのです。太平洋戦争は、あるいはその前の大東亜戦争から、何から何まですべてのすべて卑怯な日本のために、行われたのだとしなければならなかったわけです。「War Guilt Information Program」が立てられ、実施されたのです。

彼らは急いで日本国憲法を作成し、第９条をもって戦争を放棄させ、さらに東京裁判などの不当な裁判で、多くの戦争犯罪者を作り上げて死刑にし、日本が戦争犯罪者国家であることを強く意識させ、自分たちの犯罪性を完全に隠し通してきたのです。そこには、放送や新聞を始めとした出版、さらに 20 万人の公職追放をおこない、教育の分野に自分たちに都合の良い人々を入れ、彼らの筋書きに沿った、歴史教育をさせることも含まれていました。このとき、それまでは抑圧されてきた多くの左翼系の人々が教師となり、日教組が力を持つようになって、いわゆる「平和教育」という名の偏向教育が盛んとなったのです。（ゾルゲ事件などで有名な、共産主義の国際組織コミュンテルンの暗躍の影響もありました。戦争当時は盛んに戦意を鼓舞していた朝日新聞を始めとする多くの新聞も、GHQ の言いなりになったまま今に至っています。）

このような歴史がいよいよ明らかになり、アメリカに対する憧憬が色あせ、日本人であることの誇りを取り戻している現代の日本人に、もう、「素晴らしいキリスト教」の作り話で伝道することは偽り

であり、不可能なのです。それにも拘わらず、私たちは聖書が告げている救いの恵みと尊さ、神の力の偉大さを語り続けなければならないのです。